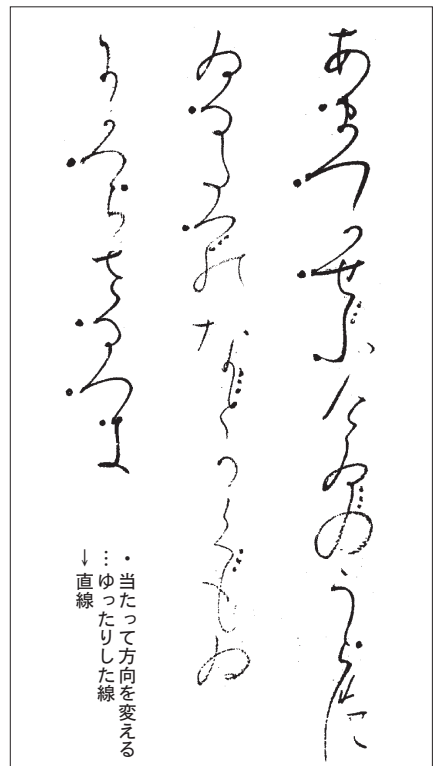


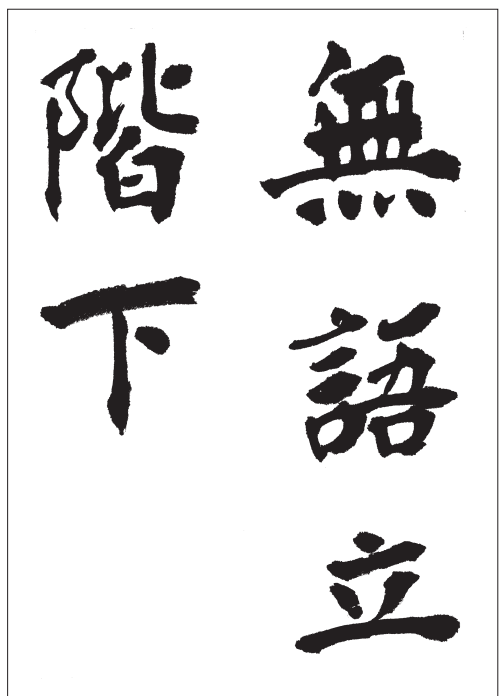
◆半紙二行たて書きに臨書して下さい。出品料440円



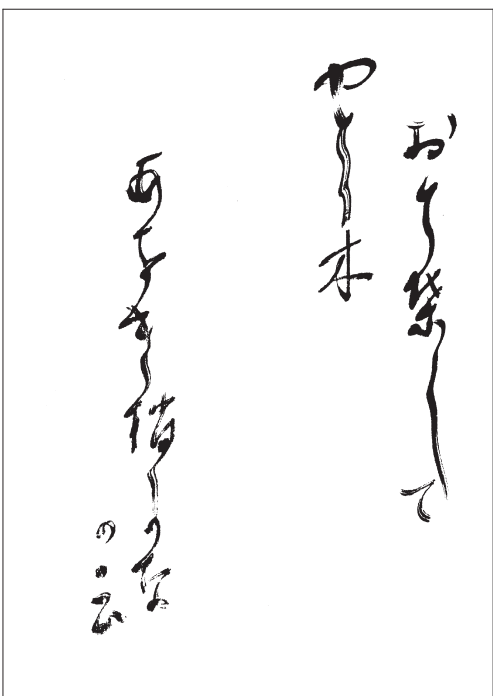
きよぶつ 御物と漢朗詠集

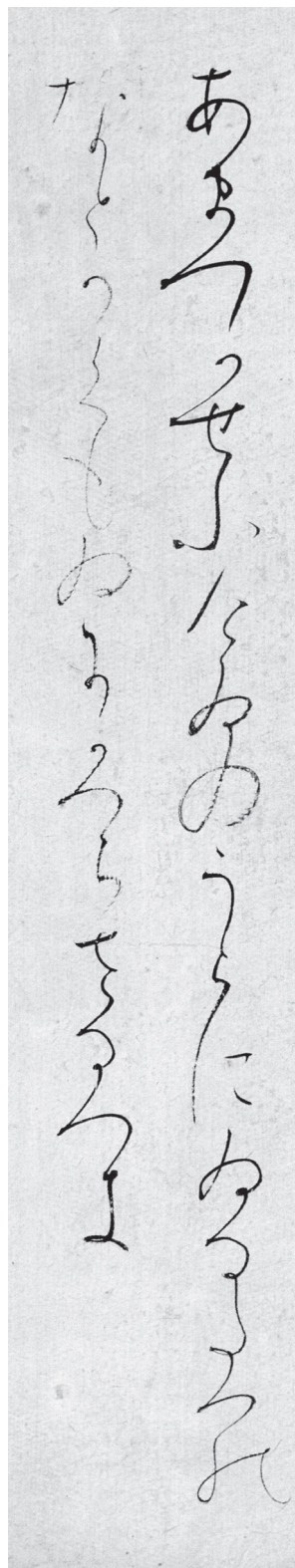
半 紙 課 題 (予 告) (十一月二十二日締切)

平岡華雪先生書 語無く階下に立ち(許燕珍)



平岡華雪先生書 落葉してやどり木書き梢かな(正岡子規)





条幅随意部として

『あまつ可<sup>か</sup>せふ介<sup>け</sup>るのうらにゐる多<sup>た</sup>つ能<sup>の</sup>など可<sup>か</sup>くもる<sup>に</sup>可<sup>か</sup>へらさるへ支<sup>ま</sup>』

と、半切二行に臨書する。緊張した連綿線と鋭い渴筆線を学んでほしい。

落款は全体の調和を考えて「○○臨」と入れる。

※随意部参考（半紙・条幅）としてもご活用下さい。抜粋可。

条幅部は一枚目無料、二枚目から五五〇円。

バーコード券に「条臨」とご記入下さい。名簿は条幅部で「(臨)」と表示されます。

## 一字書（十月二十二日締切）

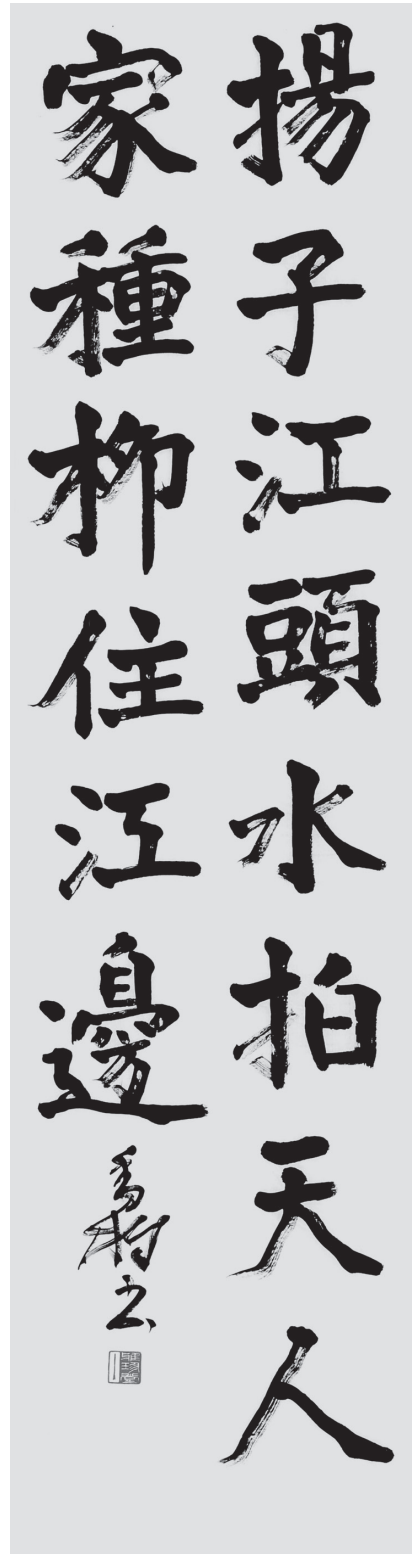
課題

# 破

- (1) 書体自由
- (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四四〇円
- (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣の空欄に  
一字と記入 段級は無記入

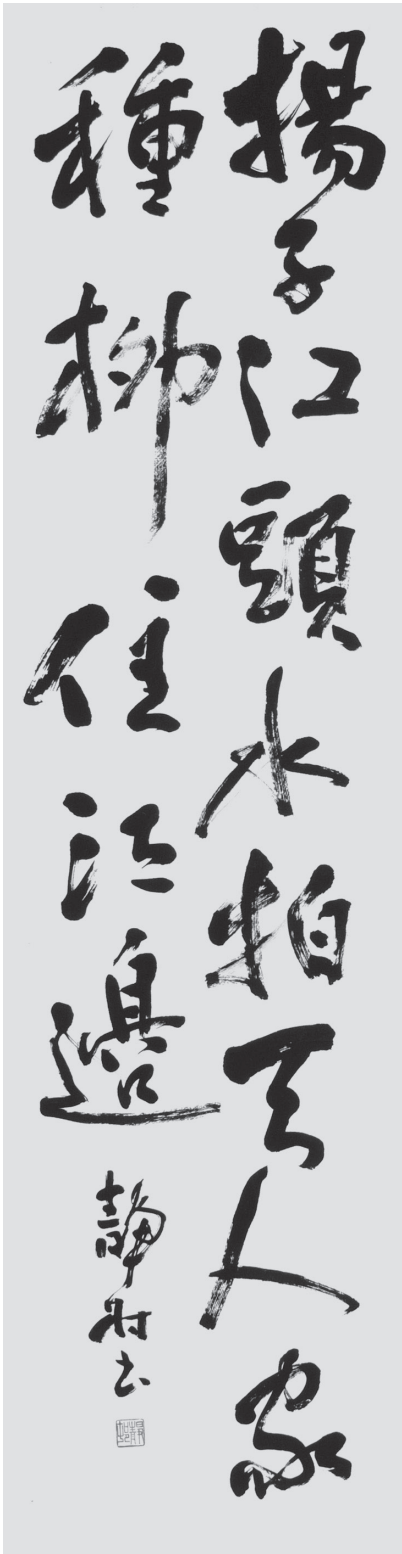
A  
高橋香樹会長書

揚子江頭水拍天 人家種柳住江邊 (馬祖常)  
揚子江頭水は天を拍ち、人家柳を種えて江辺に住す。



B  
鈴木静村先生書

今回は久しぶりに楷書作としました。今回の楷書は、自分が一番楽に書けるものとなりました。画数の多い字と少ない字が混在しているので、意識的に大小つけることはありませんでした。「江」は二字あるので、一字は「汪」としました。



一回り大の兼毫特号使用。大筆こそ鋒先の「利き」が命。太くとも活線。揚 手偏であることハッキリ。天人 意連。家種 草・行。柳 末画が中心画、伸びやかに。邊 下部分、幾通りの書き方、字典で確かめを。

訳：揚子江の頭の水は天を拍ち、人びとは柳を植えて江岸に住んでいる。

予告 (十一月二十二日締切)

雲開見山高

木落知風勁

亭下不逢人

斜陽澹秋影

(下同)

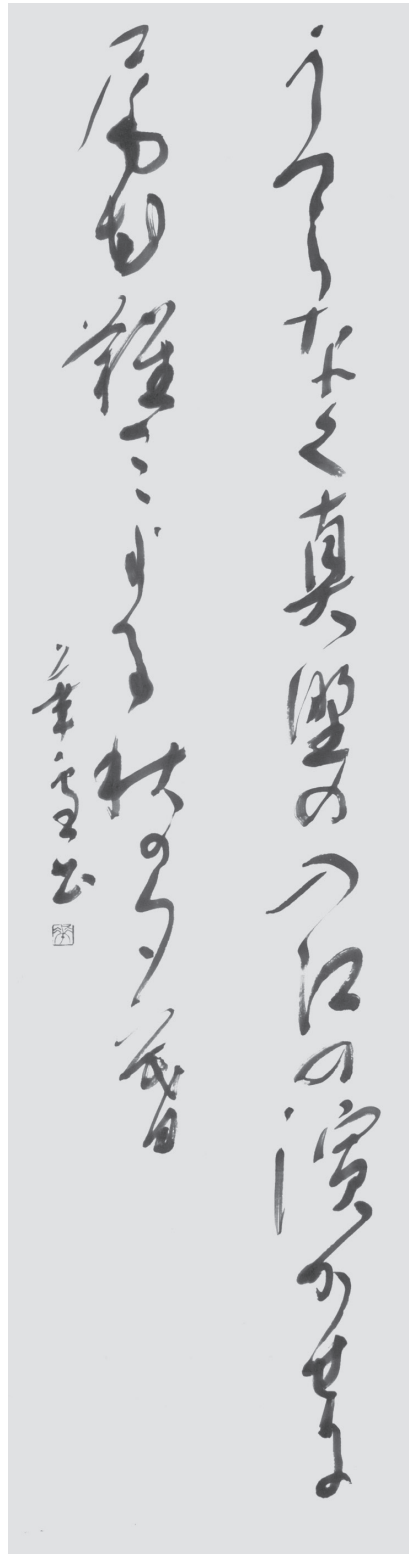
- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み(1)と記入する。)
  - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み( )に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

A

平岡華雪先生書

うづら鳴く真野の入江のはま風に尾花なみよる秋の夕暮  
うづらなく真野の入江の濱かせる尾花難三よる秋の夕暮

源 俊頼

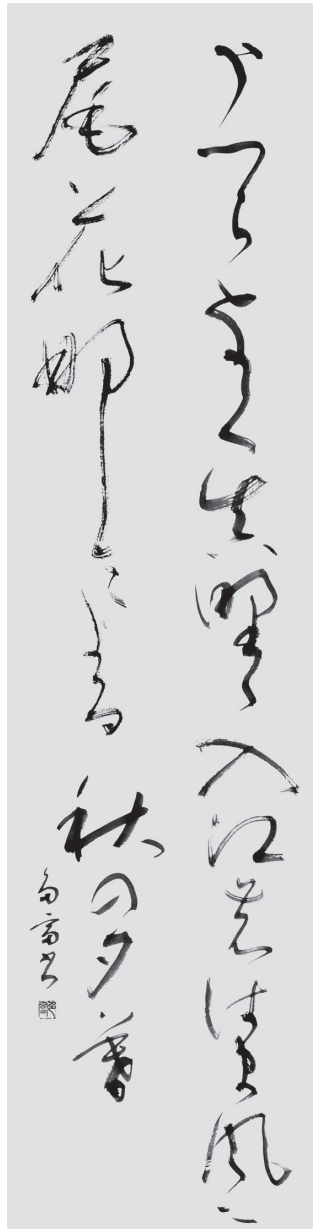


B

森 多富先生書

うづら奈く真野の入江農はま風に尾花那三よる秋の夕暮

源 俊頼



平安時代後期の歌人。白河法皇の院宣により、金葉和歌集を選進した。今月の歌も、俊頼の代表的秀歌といわれている。当時の歌人としては、感覚も新しく、伝統にとらわれない作風は、後代評価されるようになった。

学び方

源 俊頼の歌。浜を吹く夕風に、すすきの穂の波、もの寂しげに鳴く鶉の声が聞こえてくる荒涼とした秋の夕暮の景を詠んだもの。

歌意を慮り、淡墨で秋の寂寥感が表現できたらと思いましたが。構成は基本的な二行書きにしました。

名詞は、ほぼ漢字のまま使い、仮名との融合を試みました。一行目の「うづら」を仮名書きにしたので、二行目「尾花那」は、渴筆で大ぶりにして変化をつけました。三回出てくる「の」は書き分けてみました。

何度か書き、歌が馴染んできたら、運筆の遅速や筆の開閉等を工夫した作品作りを試みて下さい。

予告(十一月二十二日締切)

花におく露にやどりし影よりも枝野の月はあはれなりけり(山家集)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点(バーコード券の条かを○で囲み(1)と記入する。)
  - ・二枚目からの出品(バーコード券の条かを○で囲み( )に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

小林 崇華 先生 書

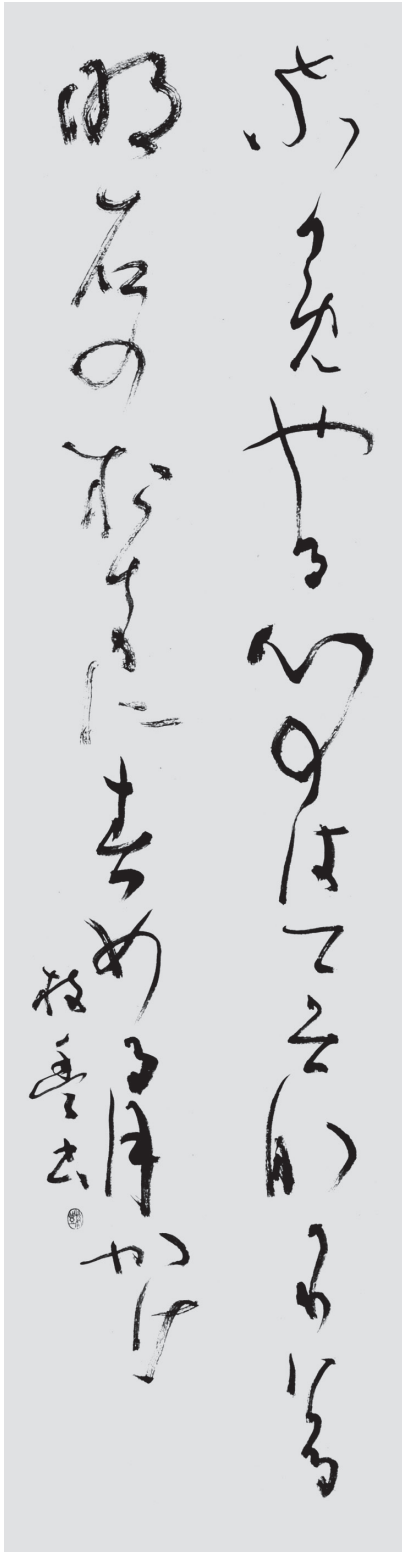
草色又新秋去後 菊花争放雁来初 (王萃)  
 草色又新なり秋去るの後、菊花争い放つ雁来る初。



訳：秋去るの後に草色も又新たになった感じがするが、雁来る頃の時節には菊花が美しく咲きでる。

鈴木 枝豊 先生 書

ながめやる心のはてぞなかりける明石の沖に澄める月かけ (千載和歌集 俊恵)  
 ながめやる心のはてそ那可利介る明石の於支に春める月かけ



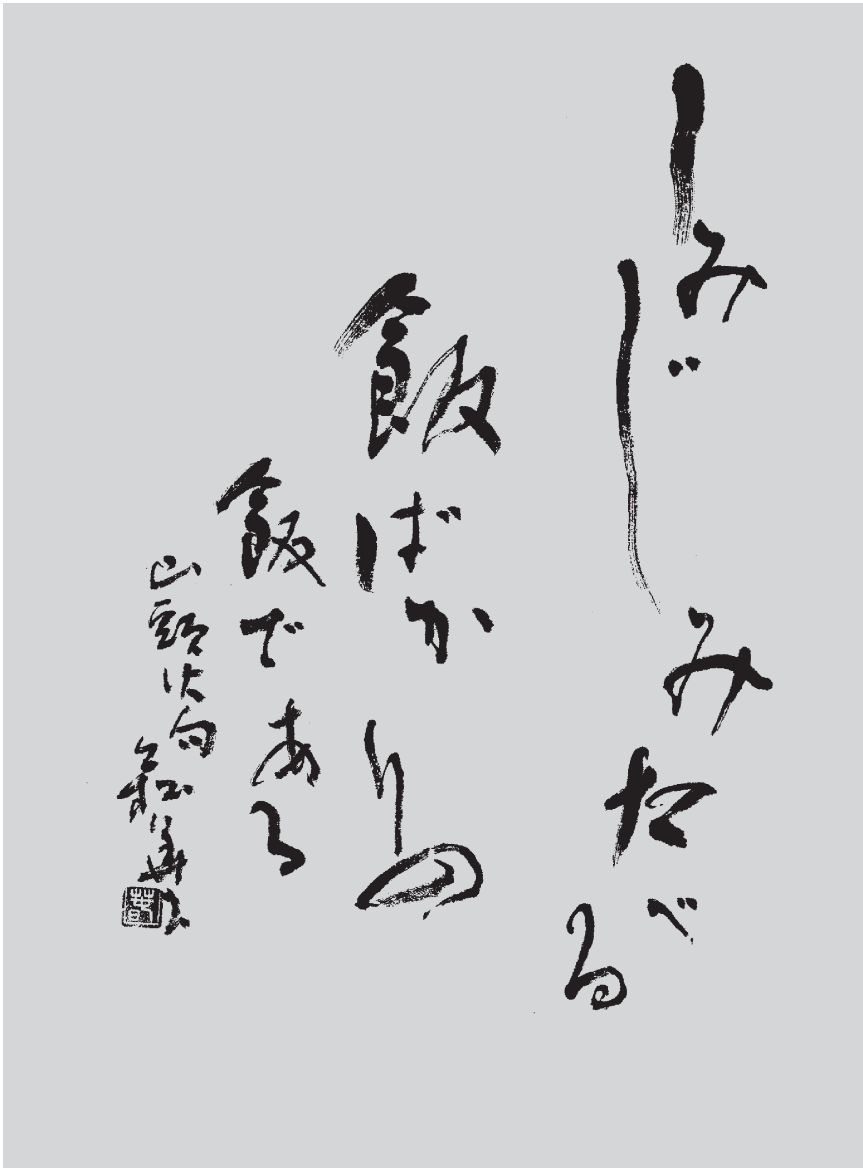
- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条随を○で囲み(1)と記入する。)
  - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条随を○で囲み( )に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

小暮 崧 華 先生 書

しみじみたべる  
飯ばかりの飯である

(種田山頭火)

今回は、字数が少ない上、漢字は「飯」二つのみ。あとは、かな。平板にならないよう、苦心しました。「しみじみ」は太細大小の変化をつけ、行に「ゆらぎ」をつける。二つの「飯」も、大小、形等、変えてみました。筆は柔らかい羊毛筆を使用。



種田山頭火(一八八二〜一九四〇)山口県生まれ。自由律の俳人。早稲田大学中退。「層雲」に参加。荻原井泉水門下。出家し托鉢生活をしながら自由律による句作多数。禅僧であるため、一汁一菜の質素な食事を摂り、食事のおいしさに感謝している。

句集『草木塔』  
日記紀行文集『愚を守る』など。

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。出品料550円。

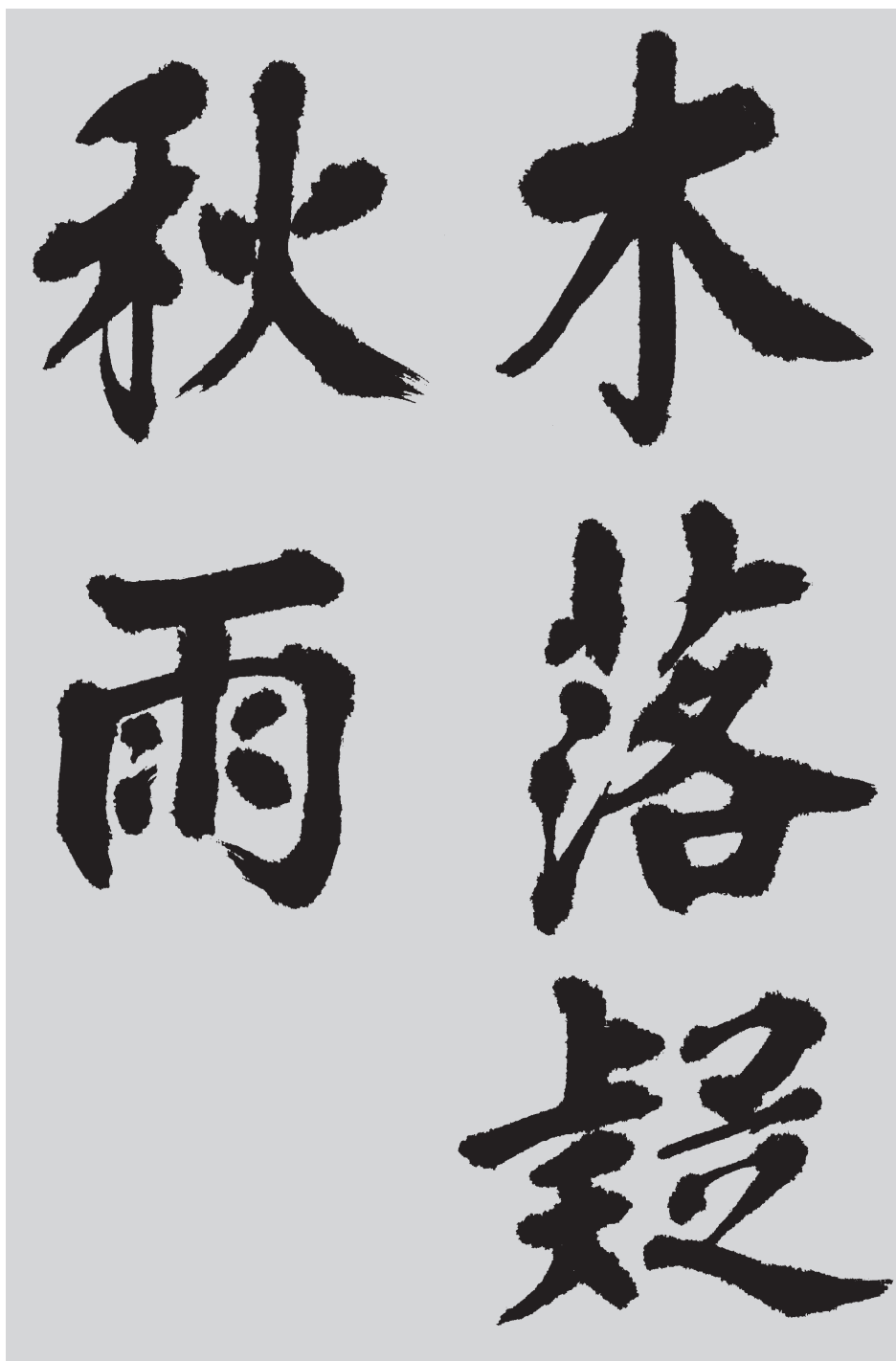
①バーコード券右空欄に漢かと記入 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

木落ちて秋雨かと疑う(李應徴)  
訳：木の葉が散って、まるで雨のようである。

〈右払いについて〉

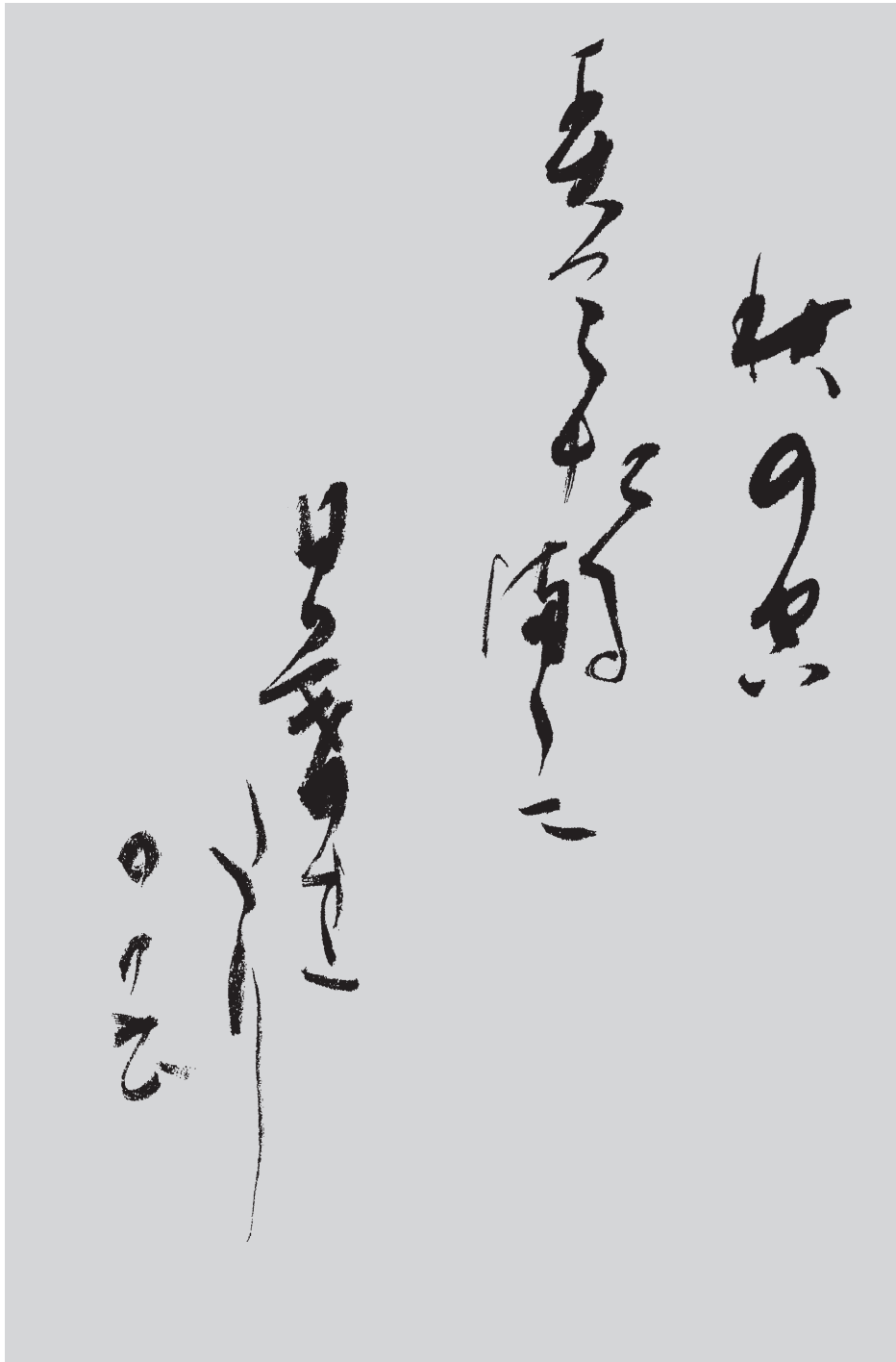
「右払い」を主画とする四文字、字配りの上での一工夫が必須。しかしこの意識過剰で全体が萎縮せぬように。なお、「木」「秋」の左右払いの接触には留意を。



◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

①漢字部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新





平岡華雪先生書

秋の空澄たるまゝに日暮れたり(垂満)  
秋の空春三たる満、二日暮連多り

〈行間の広い・狭い〉

華雪先生が使われる手法の一つ、行間の広い・狭いに注目して見て下さい。単なる余白、空きではなく、行と行とのひびき合いの中に息づいていることです。なお、中七の「満、二」の密着的寄せは、筆調上にも山場。特に落款はこの散らしとして重要視したい。挑戦を期待！

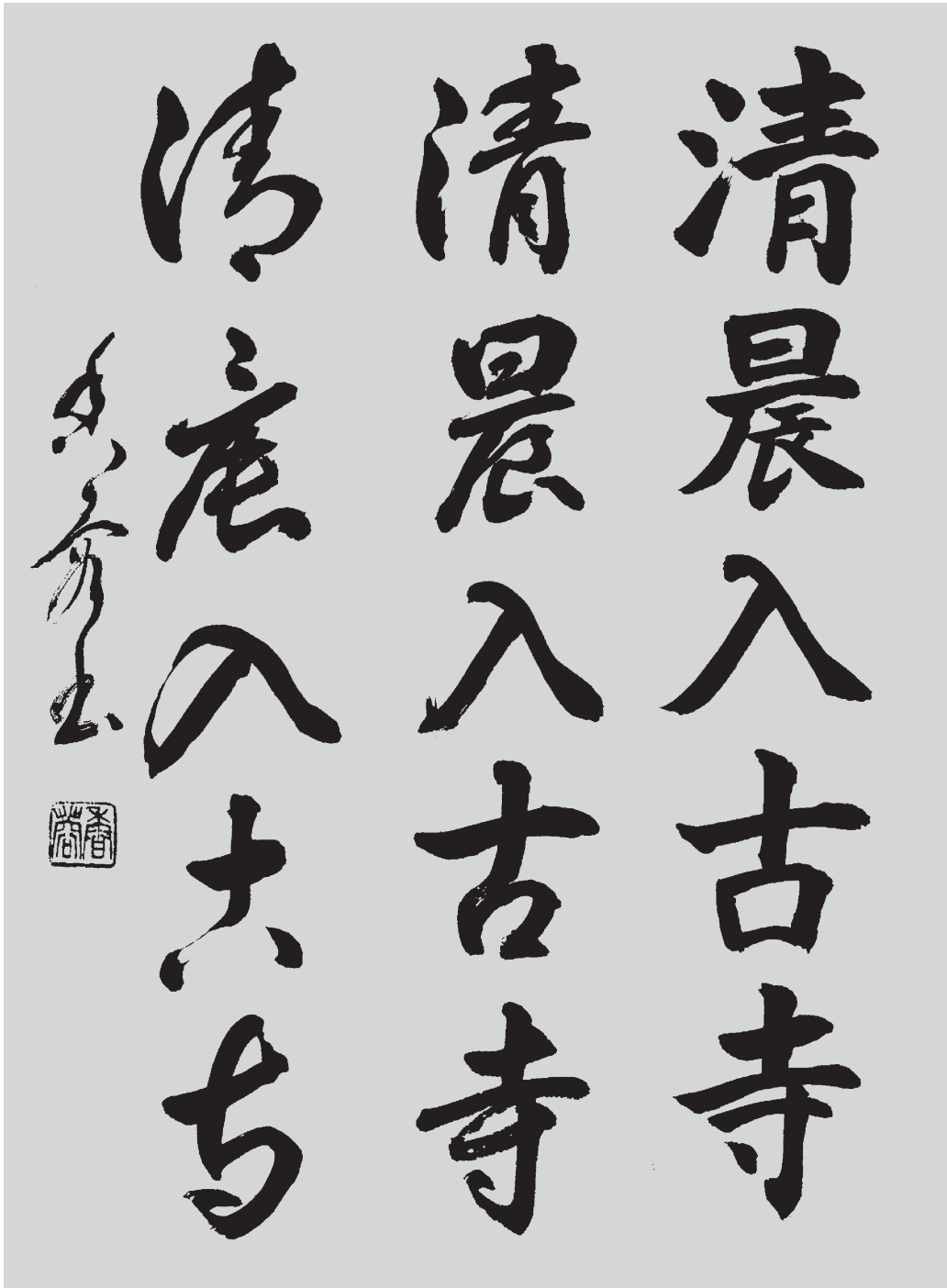
◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

①かな部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新



川上香蓉先生書

清晨入古寺（常建）  
清晨古寺に入れば

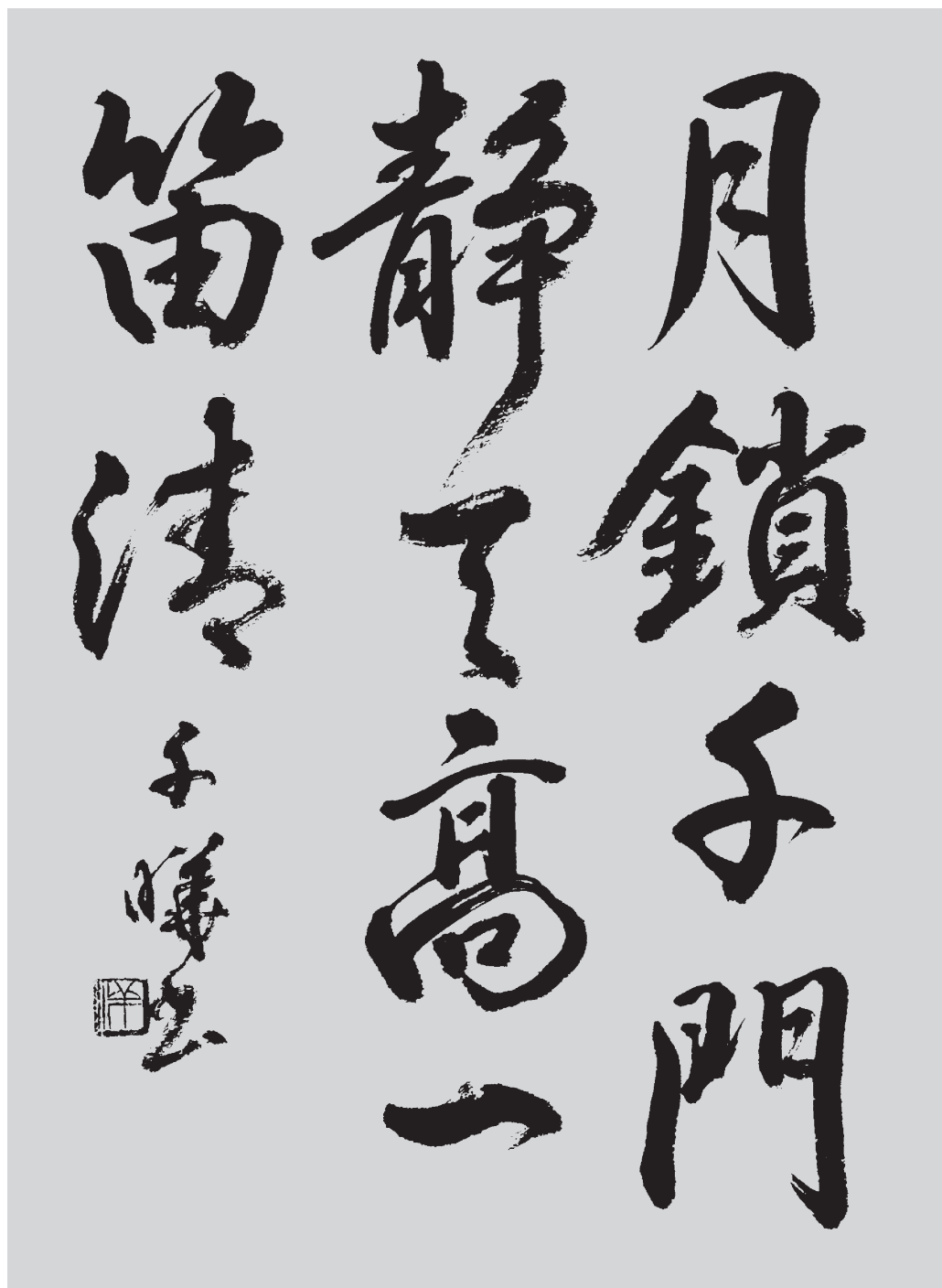


訳：さわやかな朝まだき、古い寺に入って行けば、

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円。

路川千暉先生書

月鎖千門靜 天高一笛清（張祐）  
月に鎖して千門靜かに天は高くして一笛清し

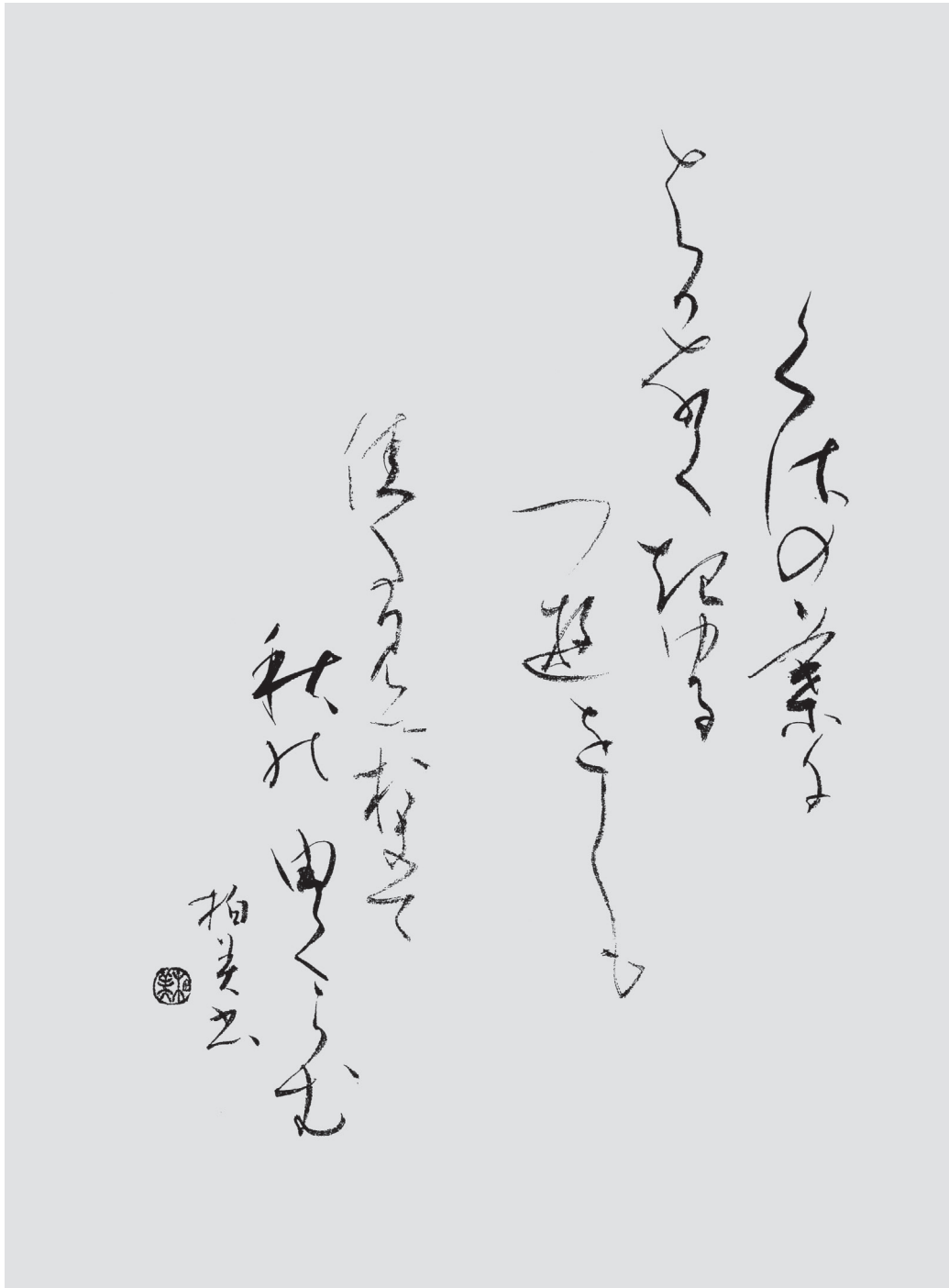


訳：多くの家々の門は月さす所に戸をしめて静かに、天は澄んで高く一声の笛も澄んで聞える。

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円

石島 柏美 先生 書

草の葉にはかなく消ゆる露をしも形見におきて秋の行くらむ（源俊賴）  
久佐の葉尔者可奈く起ゆるつ遊をしも佳多見二於支て秋能由久らむ



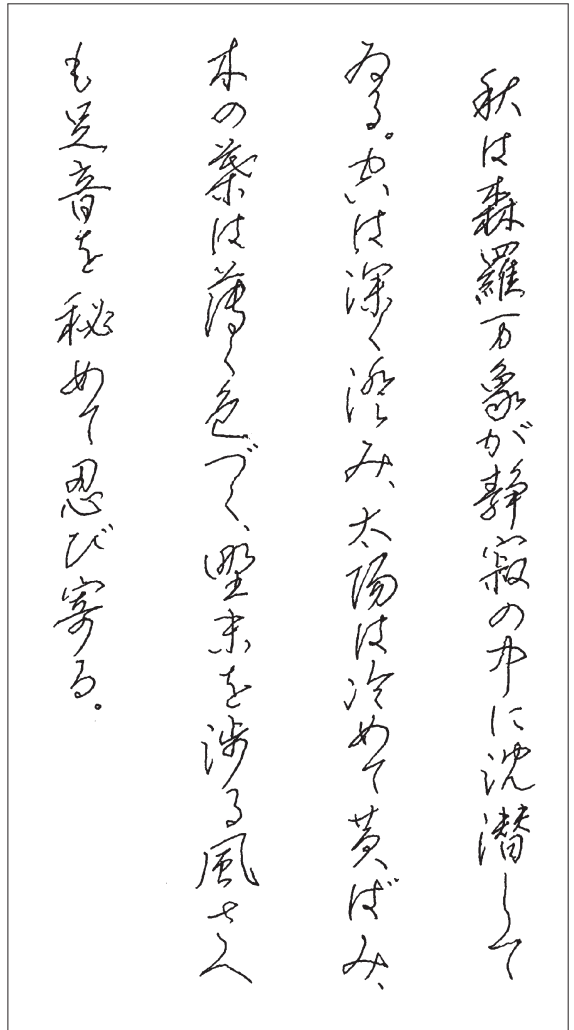
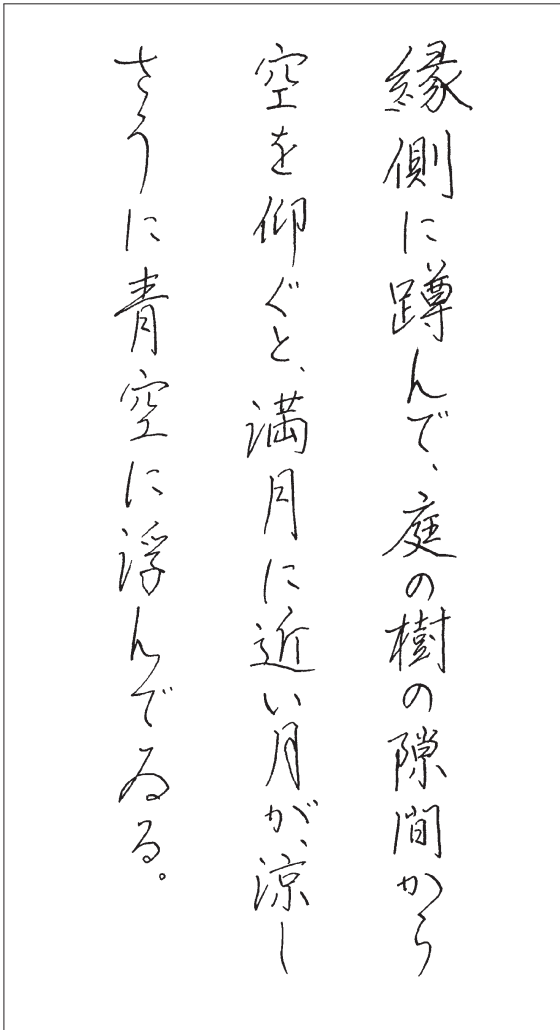
1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円

湯澤春翠先生書

稲畑曄穂先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題1 (初段階以上)

秋は森羅万象が静寂の中に沈潜してゐる。空は深く澄み、太陽は冷めて黄ばみ、木の葉は薄く色づく、野末を渉る風さへも足音を秘めて忍び寄る。

(『秋の七草に添へて』岡本かの子)

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (2) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に)次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (3) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題2 (初段階以下)

縁側に蹲んで、庭の樹の隙間から空を仰ぐと、満月に近い月が、涼しそうに青空に浮んでゐる。

(『月を見ながら』正宗白鳥)